

Title	Mademoiselle de MaupinのPréface
Sub Title	Preface to Mademoiselle de Maupin
Author	大浜, 甫(Ohama, Hajime)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1961
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.13, (1961. 12) ,p.130(17)- 146(1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00130001-0146

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Mademoiselle de Maupin の Préface

大 浜 甫

I

Théophile Gautier が1835年に発表した *Mademoiselle de Maupin* の *Préface* は、明らかに、かれが *France littéraire* 誌上に発表した Villon 論を *Constitutionnel* 紙が攻撃したことから始まった論争と裁判事件が、その執筆の直接的な動機になったと考えられ、いわゆる芸術のための芸術 (l'art pour l'art) の美学理論を積極的に表明した宣言書 (manifeste) というよりは、*Constitutionnel* 紙が代表する当時のジャーナリズムのブルジョワ的道德観、さらに一般的には功利主義 (utilitarisme) にたいする反論である。実際この *Préface* には、l'art pour l'art の理論とか Gautier の美学とか呼べるようなものはほとんど見出されず、当時の風潮や実際に起った事件を諷刺した部分が多く、そうした風潮や事件を知ることなしには、この *Préface* を理解することはできない。

1830年の7月革命に続く Louis-Philippe の王朝は、近代的な産業の発達とともに着実に社会的基礎を固めていたブルジョワジーの利益を擁護する政府であって、中庸主義 (juste-milieu) を看板にしてはいても、どちらかといえば保守的であり、とくに1831年の Lyon での絹織物業労働者の暴動、1832年の Paris での共和主義者たちの反乱、1834年の Lyon での再度の暴動を弾圧したのちは、次第に反動的な傾向を強く示すようになる。この政府は政治面のみならず、道徳面でも当然保守的であり、政府を支えるブルジョワジー及びブルジョワジーを顧客として急速に発達していた商業ジャーナリズムの一部は、道徳的にも自由を主張するロマン主義にたいして好意的ではなかった。とくに

Hernani 上演以後敗色の濃くなった保守派、古典派の批評家たちは、ロマン派の作品が道徳的に自由であり、ときには放縱であったことをロマン主義攻撃のよい口実として、その点に非難を集中しようとしたらしい。例えば Désiré Nisard が *Revue de Paris* に発表した *De la Littérature facile* (1833年12月) は、かれが翌年 *École normale* の教授の地位を手に入れている点から考えても、ブルジョワジーの道徳観に立つ御用批評家のロマン主義攻撃の典型と考えられる。実際 Jules Janin によれば、Nisard はこの記事のなかで、名前はあげないが、Charles Nodier, Victor Hugo, Alexandre Dumas 等のロマン派の作家の作品を軽薄だとして非難している¹⁾。なお Janin はこれにたいする反論のなかで、いわゆる *littérature facile* を Manon Lescaut にたとえて、「それは夜の悦びを思い、幸福で自由で金持になること、愛されることを思う」(elle pense aux folles joies de la nuit, elle pense à être heureuse, libre, riche, aimée!) ものであり、「それを非難する老人に呪いあれ」(Malédiction sur le vieillard transi qui la dénonce)²⁾ といっているが、Gautier も *Préface* の冒頭で、徳 (vertu) を祖母に、不徳 (immoralité) を若い娘にたとえて、とくに若い男にとっては祖母よりも若い娘を好むのは当然だ、という意味のことを書いている (Il me semble naturel de lui préférer, surtout quand on a vingt ans, quelque petite immoralité bien pinpante, bien coquette, bien bonne fille, les cheveux un peu défrisés, la jupe plutôt courte que longue, le pied et l'œil agaçants, la joue légèrement allumée, le rire à la bouche et le cœur sur la main)。

また1834年には *Théâtre Français* で再演される予定になっていた Dumas の *Antony* を *Constitutionnel* がわいせつな芝居であるとして非難するが、その論旨は、多くの傑作で飾られてきた、国家的記念碑 (monument national) であり、一種の博物館でもある *Théâtre Français* は、このようなグロテスクで非道徳的な見世物 (ces exhibitions grotesques et immorales) を見せるまでに墮落すべきではなく、ロマン派は暴行、姦通、近親相姦等、最もげがらわしい犯罪をその詩的題材とし、一般の感情を傷つけ、民衆を腐敗させるものであるが、とりわけ *Antony* は、一般的にみだらな現今においても最も大胆にみだらな作品 (l'œuvre le plus hardiment obscène) である³⁾、というわけである。そしてさらに内務大臣 A. Thiers にたいして、*Théâtre Français* をこのような敵の手に渡すなど訴えかけるのだが、Thiers はそれにこたえて *Antony* の上演を禁止してしまう。これにたいしてロマン派の作家と一部のジャーナリズムが抗議する一方、

Dumas は *Théâtre Français* を告訴し、裁判の結果は損害賠償を受けることで一応 Dumas の個人的勝利に終わったが、議会はこれを機会に、今後 *Théâtre Français* が政府から補助金をもらう条件として、健全な文学的伝統を守るべきことを決議し、さらに事実上芝居の検閲制度を復活させる。つまり、実質的には勝利は政府側、古典派の側に帰したといえる。

ところでこの事件の発端となった *Constitutionnel* の記事にはただ J とだけ署名されていたが、それが Antoine Jay であることが分っている⁴⁾。そして Jay は古典派の批評家であり、1831年には代議士となり、1832年には *Académie Française* 入りをしている。また内務大臣 Thiers はもと *Constitutionnel* の編集にたずさわっている。だから、復古王朝時代にあっては、文学的にはともかくも、少くとも政治的には進歩的で、その創刊当時の紙名 *Indépendant* が示す通り、独立と自由を標榜して、専制政治とたたかったこの新聞も、7月王政下では政府に忠実な御用新聞となり、当時のことを借りれば、がびのにおいと閉鎖的なにおいを放つ (*exhale une odeur de moisi et de renfermé*)⁵⁾ 新聞になっていたことが容易に想像される。

Gautier はこれよりさき、1833年12月に、*France littéraire* 誌と契約して、*Exumations littéraires* と題する、一連のフランス古典主義以前の詩人の研究を同誌に奇稿することになり、最初は1834年1月に Villon 論を、ついで2月に Scallion de Virbulneau 論、4月には Théophile de Viau 論の一部を発表していた。ところが5月になって *Constitutionnel* は突然この Villon 論をとりあげて、その作者と *France littéraire* 誌を非難する。Villon は盗みや放蕩を讃えた、真に絞首刑にあたいする極悪人 (*pendard*) であり、そんな人間を扱った記事に署名する人があり、またそれを雑誌が掲載するとは、趣味と道徳がどこまで墮落したものか、というわけである⁶⁾。これにたいして *France littéraire* は *Constitutionnel* に抗議文を送り、それを紙上に発表することを要求するが、結局一部分しか掲載されなかったため、争いは大きくなり、ついに裁判沙汰になる。ところが法廷は *Constitutionnel* の非難がきびしすぎることはみとめながらも、*France littéraire* から出された五千フランにのぼる損害賠償の要求は却下してしまう。

この一連の詩人伝は、のちさらに Saint-Amant, Cyrano de Bergerac, Chapelain, Scarron 論を加えて、1844年に単行本として発表されるが、Gautier はこれに *Les Grotesques* という刺戟的な標題をつけており、かれにたいしては好意的だった Maxime du Camp さえ「この題は不愉快であり、作品にふさわしくない」(*le titre est déplai-*

sant.....il ne répond pas à l'ouvrage qu'il indique) といっているそうである⁷⁾。また Gautier はこの Villon 論のなかで、Villon を呑んだくれ、暴飲暴食漢、泥棒 (ivrogne, goinfre, voleur)⁸⁾ と呼び、「かれが悪に費した精神と才能を善に用いたならば、われわれは、正直者を得る一方、詩人を失ったことだろう」(S'il.....eût employé au bien tout l'esprit et tout le génie qu'il dépensa au mal,nous aurions peut-être perdu le poète en gagnant l'honnête homme)⁹⁾ ともいっている。つまり Gautier は Villon をはっきり悪の詩人として紹介しているわけである。そして *Testament* 中の *Ballade de la grosse Margot* については、その全部を引用することは不可能で、「これ以上煽情的な醜悪さはありえず、読者は嘔気をもよおす」(la hideur lascive ne peut être poussée plus loin, la nausée nous en vient)¹⁰⁾ とも書いている。だから Gautier にも、当時のブルジョワジーの謹厳ぶった道徳観、いわゆるよい趣味 (bon goût) に反対し、それに挑戦しようとする意図がなかったとはいえない。

だが一方、この文学的発掘は、Ph. Chasle の *Tableau de la marche et des progrès de la littérature française au XVI^e siècle* (1828)、Sainte-Beuve の *Tableau historique et critique de la poésie française et du théâtre français au XVI^e siècle* (1828)、また Gautier の lycée 時代からの親友 Gérard de Nerval の *Choix des poésies de Ronsard, Dubelley, etc.* (1830) の *Préface*¹¹⁾ 等にく、Boileau 以後不当に忘れられ、無視されてきた詩人たちの再発見であり、名誉回復 (réhabilitation)¹²⁾ の試みでもあった。だから、術学者の批評によれば悪名高い詩人を読んでいると、意外な美しい出会いにぶっかる (En lisant un de ces poètes réputés mauvais sur le jugement d'un pédanton fait à chaque pas des rencontres pittoresques qui vous surprennent)¹³⁾ ことがあり、「問題は芸術であってそれ以外のなにものでもない」(C'est de l'art et pas autre chose)¹⁴⁾ わけであり、芸術を道徳に結びつけようとする考え方に反対する Gautier は、自由奔放な詩人 Villon を発見して、親近感をおぼえ、それを紹介したのであろう。

こうして Gautier は *Constitutionnel* の非難にたいしてはある程度前もって答えていた、ということが出来る。ところがこの裁判は事実上ほとんど敗訴におわった上、*France littéraire* の態度もかれにとっては必ずしも満足のゆくものではなかったらしい。*France littéraire* は反論のなかで、この Villon 論を弁護する一方、雑誌自体の評判をおとすことをおそれて、この記事は同誌としては例外的なものであると弁解しており、したがってこれが非道徳的であるという非難をある程度みとめたかっこうになっている。

Gautier は *Mademoiselle de Maupin* の *Préface* のなかで二度 *Constitutionnel* の名をあげて、これに皮肉な毒舌を浴びせている。一つは功利主義者を攻撃した部分で、この地上、この人生に絶対的に有用な (*absolument utile*) ものがあるだろうかと問い、第一われわれがこの地上にいること、われわれが生きていることからして有用ではない、といったあと、こう続ける。「ぼくはこの一派の最も学識ある人に、われわれがコンスティテュション紙や他のどんな種類の新聞にも予約申し込みをしないということ以外に、何の役に立ちうるか、いえるものならいってもらいたい」 (*je défie le plus savant de la bande de dire à quoi nous servons, si ce n'est à ne pas nous abonner au Constitutionnel, ni à aucune espèce de journal quelconque*)。もう一つは、不道德な作品を非難する批評に反駁した部分で、こう書いている「不道德という非難はあまりにも文芸欄と『雑報欄』の記事に沿ってうろついていたため、不十分で使いものにならなくなってしまい、なおも必死の勇をふるってそれを用いるのは、いまやほとんど、周知の通りおしとやかに進歩的な新聞であるコンスティテュション紙だけになってしまった」 (*A force d'avoir traîné le long des feuilletons et des articles Variétés, l'accusation d'immoralité devenait insuffisante, et tellement hors de service, qu'il n'y a plus guère que le Constitutionnel, journal pudique et progressif, comme on sait, qui eût ce désespéré courage de l'employer encore*)。

ところで Gautier はこれ以前に、小説集 *Les Jeunes-France* (1833) のなかでも同紙の名を二度あげているが、二箇所とも、文脈は嘲笑的であるにはちがいないが、*Constitutionnel* を反イエズス派の典型として引き合いに出している¹⁵⁾。実際この新聞は、宗教については、反教権的、反イエズス派的立場をとっていたらしく、その点で *Les Jeunes-France* でのとりあげ方は、むしろ同紙にたいして好意的ではないけれども、*Préface* の場合とは大いにちがっている。

したがって Villon 論に端を発した事件が Gautier の *Constitutionnel* にたいする個人的反感をかき立てたことはたしかであり、この事件が *Préface* 執筆の一つの動機になったと考えることができるだろう。

〔註〕

1) Jules Janin: *De la Littérature facile, réponse à M. Nisard*, in *Portraits et caractères contemporains*, Hachette, p. 22. なおこの反論は当時の新聞か雑誌に発表されたものと思われるが、その点明らかにしえなかった。

2) *ibid.*, p. 34.

3) R. Jasinski: *Les Années romantiques de Théophile Gautier*, 1929, Vuibert, p. 175.

- 4) *ibid.*, p. 175.
 - 5) Edmond Texier: *Biographie des journalistes*, cité par Jules Bertaut dans *L'Epoque romantique*, 1947, Tallandier, p. 196.
 - 6) R. Jasinski: *op. cit.*, pp. 188—189.
 - 7) *ibid.*, p. 248.
 - 8) Th. Gautier: *Les Grotesques*, 1856, Michel-Lévy, p. 28.
 - 9) *ibid.*, p. 13.
 - 10) *ibid.*, p. 28.
 - 11) Jasinski は *Les Grotesques* 執筆の動機として Nerval の戯曲 *Villon l'écolier* と *Jodelet* をあげているが、なぜかこの *Préface* のことにはふれていない。(p. 223.)
 - 12) *Les Grotesques*, p. 3.
 - 13) *ibid.*, p. 3.
 - 14) *ibid.*, p. 26.
 - 15) *Le Constitutionnel* n'avait pas plus peur que lui des Jésuites……(*Les Jeunes-France*, 1878, Charpentier, p. 74.)
- Un abonné du *Constitutionnel*,……prétendit que c'était un conciliabule de jésuites. (*ibid.*, p. 227.)

II

7月革命は結局 *juste-milieu* の勝利、いいかえればブルジョワジーの勝利におわり、政府とブルジョワジーは相たずさえて、左右からの抵抗をおさえ、その地歩を固めてゆくが、1831年と1834年の Lyon での暴動が示す通り、社会問題、労働問題は解決するどころか、次第に深刻さをましてゆく。つまり、急速に発達する資本主義社会のなかで、政府をうしろだしにするというより、自分たちで政府をつくっていた資本家の下には、今日の常識では想像もつかないような低賃金と長時間労働¹⁾ という悪条件に苦しむ無産階級が生まれていたわけであり、Lyon をはじめ各地で発生した暴動は、そうした労働条件にたえかねた人たちの追いつめられた行動であって、政治的意図はそれほど強くなかったといわれる。これにたいして政府は弾圧政策をもつてのぞみ、1834年にはすべての労働者の団結を禁止してしまう。このような情勢のもとでは、文学者、思想家のうちから、あるいはその人道主義的、あるいはその宗教的、あるいはその社会主義的立場から、言論活動によって抗議する者が現われるのも当然であろう。7月革命は一方ではブルジョワジーに奉仕する文学を、他方では貧しい人たちの味方に立とうとする文学を生み出したといえる。そして社会問題に関心を持ち、貧しい人たちの側に立とうとする傾向は、とくにロマン派の作家に著しい。Hugo を中心とするいわゆる *Cénacle* の詩人たちが、宗教的にはカトリック、政治的には王党派と、きわめて保守的であったものが、

1830年以後次第に進歩的、社会主義的になっていったことはよく知られている。もともとロマン主義には理想主義的な一面があったわけで、そこから、社会主義とまではいえなくても、人道主義的な立場が生まれてくるのはむしろ当然であり、この点で、フランスのロマン主義は文学的革新を主張しながら、政治、社会の面で反動的であったという矛盾を、7月王政の時代になってやっと克服した、と考えることもできるだろう。

作品の上にそうした傾向がはっきり現われるのが比較的遅かった Hugo の場合でも、かれが作家の社会的使命に目ざめたのははるかに早かったようである。「私の社会主義は1828年にはじまる」²⁾ というかれ自身の晩年のことばは信用しがたいにしても、作品の上では *Les Feuilles d'automne* (1831) によっていわゆる内密な (intime) 詩を提出し、その序文では超然とした態度を表明する一方、当時の日記には社会や政治の問題について種々の考察を書きしるしている。例えば7月革命直後には、以前に抱いていた王党派的、カトリック的信念 (ancienne conviction royaliste et catholique) が崩れ去ったこと、民衆はすでに共和制度への準備ができてきていること、詩人にとっても問題は自由であり、革命であること、などがしるされている³⁾。そしてかれの社会的、政治的関心は、例の *Le Roi s'amuse* の上演禁止事件 (1832年11月) によってさらに強められたことは容易に想像され、*Lucrece Borgia* (1833) の序文でははっきり演劇の社会的使命、人道的使命 (une mission sociale, une mission humaine) を説いている。

Lamartine の態度は Hugo 以上に明確であり、かれは1831年に発表したパンフレット *La Politique rationnelle* では、7月革命を肯定し、作品の上でも同年発表した詩 *Les Révolutions* で、政治的、社会的進歩主義の信念を表明している。そして1833年代議士に当選してからは、つねに人道主義の立場を守り、貧しい人たちの側に立ち反政府的な発言をして、文学活動だけでなく、実際の行動においても政治、社会に参画する。

また詩的生活と政治生活を分けることを信条として象牙の塔にこもったとされる Vigny さえ、一時はサン・シモン主義 (saint-simonisme) の影響を受け、積極的に社会改革的な意見を表明することはなくても、一時はそうした思潮にかなり同情的だったといわれる⁴⁾。

また一方、saint-simonistes や、自由主義カトリック (catholiques libéraux) 等、Nerval のことばを借りれば赤い予言者たち (prophètes rouges) は、この時期にジャーナリズムに進出して、その進歩思想、救世主義 (messianisme) を宣伝する。

もともと C.-H. de Saint-Simon の思想には、単に合理的な社会主義だけでなく、救

世主義的な神秘思想がふくまれているとされるが、かれの後継者たちはその神秘性を強調し、新興宗教をおこし、一種の教会組織を作りあげ、*Balthémy Enfantin* と *Saint-Amant Bazard* がその教祖 (*pères*) となる。そして1831年には *Bazard* たちが脱会する分裂さわぎがおこり、また翌年には *Enfantin* をはじめ何人かの「使徒」(*apôtres*) が、風俗攪乱の罪で *Saint-Lazare* に投獄される事件がおきる。このようにこの派の動きはスキヤンダルをまきおこし、はでで、狂信的であったため、次第に信用を失うようになってきたらしいが、一方では *Pierre Leroux* のような、*Saint-Simon* の流れを汲む思想家の、地道で誠実な文筆活動もあって、その影響は大きかったといわれる⁵⁾。

Leroux は *Paul-François Dubois* が自由主義的な新聞 *Globe* を創刊したとき (1824) から同紙に協力し、*Sainte-Beuve* ともそこで知り合ったが、とくに *Globe* が *Dubois* の手を離れて *Enfantin* の手に渡り、*saint-simonisme* の機関紙となってから (1830年末) は、その主筆として社会主義的な論説を同紙に発表する。そして例の分裂事件のおりに、*Hippolyte Carnot* 等とともに狂信的な *Enfantin* のもとを去り、*Revue Encyclopédique* に移る。*Leroux* はこれらの新聞雑誌に発表した論文で、一般大衆に向けてかれの進歩思想を説くだけでなく、思想家や詩人に呼びかけて、かれらにその社会的責任を自覚させようとしたらしい。*Revue Encyclopédique* に発表した *De la Poésie de notre époque* (1831年11月12月) は、*Hugo*, *Lamartine* 等の作品論であると同時に、かれらへの訴えかけでもあり、かれらの作品が社会の現実から目をそらした懐旧的なものである点を非難する一方、かれらの将来の進化を期待し、それを促そうとする呼びかけである⁶⁾。他方、芸術の有用性を否定する、いわゆる *Petit Cénacle* の青年たちにたいしては、*Leroux* 一派の批評はきわめて攻撃的であったらしい。*Gautier* の処女作である *Poésies* (1830) は、すでに *Globe* がとりあげて非難している (1830年11月) が、*Pétrus Borel* の小説集 *Champavert* (1833)、*Philothée O'Neddy* の詩集 *Feu et Flamme* (1833) にたいしても、*Revue Encyclopédique* はそれぞれ (1833年2月、7月—8月) 非難をあげているようである⁷⁾。

saint-simonisme 以上に空想的な *fouriérisme* も7月革命後次第に信奉者を獲得し、とくに *saint-simonistes* が分裂したおりにはそのうちから *fouriérisme* に改宗する者も出て、いわゆる *phalanstère* の運動は大きくなり、1832年には機関紙 *Phalanstère* さえもつほどになる。*Charles Fourier* の思想は、物質界のみならず精神界においても作用するという有名な万有引力 (*attraction universelle*) であるとか、人間の生物学的進

化というような奇怪な考えをふくんでおり、はじめはあまり問題にされなかったらしいが、7月革命後の不安な時期には、そのような messianisme, utopie も、一部の人々から受け入れられたと解すべきだろうか。

Félicité de Lamennais を中心とする catholiques libéraux も、この時代に活発な活動を開始し、7月革命直後の9月には「神と自由」(Dieu et la liberté)を標語とする機関紙 *Avenir* が創刊される。そして、神は直接民衆に主権 (souveraineté) をあたえたと主張して、民衆とくに労働者の権利を要求し、時の権力にたいして攻撃的な論戦を展開すると同時に、すべての自由主義者に向って連合を呼びかける。*Avenir* は発行部数が多いときでも三千程度で、また翌年の12月には廃刊になるが、その反響はきわめて大きく、全国のおもに若い司祭たちからその主張に賛同する熱狂的な手紙が殺到したと、伝えられる⁸⁾。ロマン派の詩人も、Hugo が *Notre-Dame de Paris* の一章を同紙に発表したのをはじめ、Lamartine, Vigny もそれぞれ寄稿して、この新聞に協力している。その後 Lamennais 等はローマ法王から否認されることになるが、それでもその人気はおとろえず、1834年はじめに発表した *Les Paroles d'un croyant* はたいへんな売行きを示し、これがその出版社であった有名な Renduel 成功の一因であったとさえいわれている⁹⁾。

Gautier は *Mademoiselle de Maupin* の *Préface* のなかで、Hugo や Lamartine にたいしては、神のような詩人 (divin poète) の例としてその名をあげ、忠実な弟子としての態度を保っているが、saint-simonistes, Lamennais, Fourier 等の進歩主義者、功利主義にたいしては、道徳的な批評家にたいしてと同様に、ふざけた調子で、皮肉な攻撃をあびせかけている。Gautier にいわせれば、かれらはサン・シモン派の舞台の板の間から生え出した、かなり奇妙な新種の茸のような理論 (une théorie de petits champignons d'une nouvelle espèce assez curieuse) を奉じる功利主義的批評家 (critiques utilitaires) であり、経済学者である自称して社会をすっかり改造しようとする連中 (gens, qui ont la prétention d'économistes et qui veulent rebâtir la société de fond en comble) であり、人間が改良可能な機械である (l'homme est une machine susceptible d'amélioration) と信じる進歩主義的ジャーナリスト (journalistes progressifs) である。そして、Lamennais のように、ある者はかれらの宗教にいくらかの共和主義を注ぎこみ (Quelques-uns font infuser dans leur religion un peu de républicanisme), ロベスピエールとイエス・キリストを組み合わせ (accouplent Robespierre et Jésus-Christ), ある者

は最後の要素としてそれにいくらかのサン・シモン主義思想をつけ加える (d'autres y ajoutent, pour dernier ingrédient, quelques idées saint-simoniennes)。かれらは、作家が詩なり小説なり作品を発表すると、「この本は何の役に立つか」(A quoi sert ce livre?)と問う。しかしこの世には絶対的に有用なものは存在しないのであり、また、真に美しいものとしては何の役にも立たぬものしかなく、有用なものはすべてみにくい (Il n'y a de vraiment beau que ce qui ne peut servir à rien; tout ce qui est utile est laid) というわけである。そして、かれらは進歩ということをおこなうが、食物にしる、建築物にしる、芸術にしる、古代より進歩したといえるようなものは一つもなく、進歩というものは気がいって、大天才で、ばかである (un fou, un grand génie, un imbécile) Fourier, 将来人間にも尻尾が生えたと予言し、人間の器官と感覚を発達させる (développer les organes et les sens) と約束する Fourier の方法によってしか、可能でないと、逆説をろうしている。

〔註〕

- 1) 1日14時間から15時間の労働にたいして男子の日給 2 frans, 女子の場合 1 franc という例があげられている。(A. J. George: *The Development of French romanticism*, 1955, Syracuse University Press, pp. 52—53)。
- 2) H. J. Hunt: *Le Socialisme et le romantisme en France*, 1935, Oxford, p. 248.
- 3) V. Hugo: *Journal 1830—1848* publié et présenté par Henri Guillemin, 1954, Gallimard, pp. 9—13.
- 4) chefs du romantisme の evolution については A. J. George: *op. cit.* の他, A. Cassagne: *La Théorie de l'art pour l'art en France*, 1906, Hachette 中とくに II. L'Adaptation du romantisme' に詳しい。
- 5) D. W. Evans: *Le Socialisme romantique*, 1948, M. Rivière は Leroux のとくに Hugo, Sainte-Beuve, G. Sand, への影響を指適している。
- 6) D. W. Evans: *op. cit.*, pp. 154—166.
- 7) H. J. Hunt: *op. cit.*, p. 357, p. 373.
- 8) H. Guillemin: *La Bataille de Dieu*, 1944, Milieu du Monde, p. 32.
- 9) J. Bertaut: *op. cit.*, p. 118.

III

Hernani の戦いがおわって Hugo を中心とする Cénacle が解体したあと、1830年の末頃から、Gautier, Nerval, O'Neddy, Borel 等の若い詩人や芸術家が彫刻家 Jean Duseigneur のアトリエに集まって、いわゆる Petit Cénacle をつくったことはよく知られている。Gautier 自身晩年の回想録 *Histoire du romantisme* (1872) で、そこに集った仲間の肖像を詳しく描いている。ところでこの集りは、急進的な学生を中心とする反

政府的な青年の団体と混同され、Jeune-France とか、Bousingot とか呼ばれるようになり、時の風俗、習慣から社会、政治にまで反抗する、過激で革命的な青年の集りと見なされるようになったらしい。実際、当時の新しい文学に好意的でなかった *Figaro* 紙は Jeune-France や Bousingot について一連の記事を掲載し、かれらの常軌を逸した服装や言行を諷刺して、こうした呼び名を有名にした¹⁾。そして Petit Cénacle の青年たちもこのような評価を必ずしも拒否しようとはしなかったらしく、当時のブルジョワ的風俗、その俗物性に反抗して、独創を求め、自由を謳歌するあまり、ときには過激な行動や作品によって自ら Jeune-France や Bousingot の伝説をつくりあげた傾向がなかったとはいえない。

例えば O'Neddy は *Feu et Flamme* の最初の詩 *Pandæmonium* で Jeune-France の集会を描いているが、それによればかれらは、ブルジョワジーにたいするはげしい憎悪で武装し (*s'armer/De haine virulente...../Contre la bourgeoisie*)、言語に絶する気ちがい沙汰 (*d'indicibles démenes*) にふける、呪われた青年フランス (*les damnés jeunes-France*) であって、その集会所である Jean のアトリエは、ポンスの焔に妖しく照らされる悪魔の殿堂 (*pandæmonium*) である²⁾。

Gautier も 1833年に発表した小説集 *Les Jeunes-France* で仲間の奇行や宴会さわぎを描いている。そのうちの一編 *Elias Wildmanstadius* は、同名の人物を主人公とする話であるが、かれは、青年フランスの数多い変種 (*innombrables variétés de Jeunes-France*) のうちでも最もいちじるしい変りだねで、天使の手違いから生まれるのが三百年も遅れた中世人 (*homme moyen-âge*) であり、住居も家具も服装も中世風なら芸術も中世芸術しか愛さず、町の住民のブルジョワ風俗を憎むためにほとんど外出もせず、たまの外出は中世建築の寺院訪問に限られていたが、あるとき家で寺院の絵をかいているとき実際の寺院に落雷し、かれはふしぎな共感作用 (*l'effet d'une sympathie mystérieuse*) によって死んでしまったという、ふざけた話である³⁾。ところで Gautier はのちに、この人物が決して単なる空想でつくられたタイプ (*type de fantaisie*) ではなく、実際に Petit Cénacle にいた画家の Célestin Nanteuil から暗示されたものだといっている⁴⁾。だからこのような人物像が誇張されていることはいうまでもないが、実際かなり風変りな人物が当時仲間のうちにいたことも事実であろうし、このような作品が Jeune-France の伝説をつくりあげるのに役立ったこともたしかであろう。

Gautier はこの小説集にかなり長文の *Préface* をつけているが、O'Neddy の *Feu*

et Flamme には *Avant-Propos* が、また Borel の詩集 *Rhapsodies* (1831) と小説集 *Champavert* (1833) にはそれぞれ *Préface* と *Notice* がついており、これらはいずれも Petit Cénacle の立場を表明した一種の *manifeste* と考えられる。しかし Gautier の場合、その語調は O'Neddy や Borel の場合とかなり異っている。

O'Neddy の *Avant-Propos* は、社会的秩序と、とくにその排泄物である政治的秩序 (*l'ordre social et surtout l'ordre politique qui en est l'excrément*) を軽蔑し、社会的虚偽 (*mensonge social*) と、キリスト教的虚偽 (*mensonge chrétien*) を破壊すべきことを、はげしい調子ではっきり宣言している⁵⁾。また Borel の場合、有名な「ぼくの共和主義は狼狂だ」(*mon républicanisme, c'est la lycanthropie!*)⁶⁾ とか、「パリには二つの巢窟、一つは泥棒どもの、他の一つは人殺しどもの巢窟があり、泥棒どものそれは取引所であり、人殺しどものそれは裁判所だ」(*A Paris, il y a deux cavernes l'une de voleurs, l'autre de meurtriers; celle de voleurs c'est la bourse, celle de meurtriers c'est le Palais-de-Justice*)⁷⁾ ということばが、これらの序文のなかに書かれている。そして O'Neddy も Borel も芸術上の立場とか理論と呼べるようなことにはほとんどふれていない。

それにたいして Gautier は、本というものは巻頭の序文と巻末の目次さえ読めば本文は読まなくても分ってしまうと、例のふざけた調子で書き出している。そして自己紹介にうつると、自分は怠惰な青年で、政治的意見はゼロ、「革命でもうけるのはガラス屋だけだ」(*Il n'y a que les vitriers qui y trouve de profit*) と思い、芸術に関しては、芸術は軽業 (*jonglerie*) だと考えて、芸術家のうちでは軽業師 (*acrobates*) しか尊敬せず、他に能がないので詩を作っていたのだが、三カ月前に友人たちのおかげで、申し分のない青年フランス (*un Jeune-France accompli*) に仕上げられてしまったから、今後はすばらしい悪業 (*scélératesses charmantes*) を犯し、放蕩にふけり、*Antony* さえもそれに比べれば子供だましにすぎないような姦通小説 (*histoires adultériennes*) や寝室劇 (*dramas d'alcôve*) を書くだろう、と結んでいる⁸⁾。しかしこのなかには、「ぼくは絵の方を、その表現している実物より好む」(*Je préfère le tableau à l'objet qu'il représente*) ということばがあり、これはかれの造型芸術への関心、自然の美より人工の美を好む美学的立場を、早くも示したものと考えられ、その点では、さきに引いた芸術は *jonglerie* であるということばも、単なる冗談ではなくて、芸術は高度の技巧を必要とするという意味に解釈すべきかもしれない。とにかく Gautier のこの *Préface* は、

O'Neddy や Borel のそれにくらべるとはるかにおだやかであり、*Romans goguenards* と副題をつけられた小説そのものにふさわしく、反抗的であるよりは冷笑的である。

これより前に Gautier は、最初の詩集 *Poésies* (1830)に21篇の詩を加えて、*Albertus ou l'âme et le péché* (1832) を発表し、それにも *Préface* をつけているが、それともだいたい似たような、超然とした態度を表明してはいるものの、その調子は *Les Jeunes-France* の *Préface* の場合よりもむしろ強く、明確である。*Albertus* の *Préface* によれば、筆者は赤にも白にもなら政治的色彩 (*couleur politique*) をもたず、ただなにもしない口実を得るために詩を作っている (Il fait des vers pour un prétexte de ne rien faire) のであって、それが何の役に立つかとたずねる功利主義者、理想主義者、政治学者、サン・シモン主義者にたいしては、「それは美しくあることに役立つ」(*Cela sert à être beau*) と答える、というわけである⁹⁾。

同じ頃 Nerval は Sainte-Beuve に宛てた手紙のなかで、*Petit Cénacle* が単なる集会 (*association*) であると説明し、各自がその作品を持ちよって仲間のあいだでためし、ある程度発表の欲求をみたくす場である、という意味のことを書いている¹⁰⁾。だから、この *Petit Cénacle* とは、当時猛烈ないきおいで発達していた商業ジャーナリズムにまだのることのできなかつた、それだけに純粋な立場にいた、若い芸術家の集りであり、芸術に絶望しまいとする青年の隠れ家 (*refuge d'une jeunesse.....qui ne voulait pas désespérer de l'art*)¹¹⁾ でもあったわけで、大してはっきりした美学的な立場や政治的主張ももっていたとは考えられず、多くの研究家もみとめるように、全体としてはそれほど反抗的でも過激でもなかつたらしい。しいて *Petit Cénacle* に一貫するものを引き出すとすれば、それは芸術における自由の要求と、反俗精神だったということができるだろう。ただそうしたものが人によっては政治、社会への無関心、芸術への専念という静かな形をとったり、反抗のための反抗、スキャンダルをまきおこす言動というげいしい形をとって現われた、と考えられる。

ところで、Gautier や Nerval が Borel 等に代表される過激派から次第に離れていったことは知られている。Borel は 1832 年の 9 月、一種の機関紙ともいえる週間新聞 *Liberté* を発行するが、これには Gautier も Nerval も寄稿していないか、少なくとも名前を出していないそうである。また 1834 年末、*Petit Cénacle* が解体したあと、Gautier、Nerval を中心に新顔を加えて Doyenné 街にいわゆる *bohème* の集りが作られるが、*Petit Cénacle* においては中軸的な人物 (*une individualité pivotale*)¹²⁾ であった Borel

も、O'Neddy もここにはほとんど出入りしていないようである。

Albertus の *Préface* と *Les Jeunes-France* のそれに見られる語調のちがいが、また冷笑的小説 *Les Jeunes-France* の発表それ自体が、この頃には *Gautier* が仲間のうちの過激派とはすでにある距離をおいていたことを示している。*Mademoiselle de Maupin* の *Préface* では、ジャーナリズムの非難の対称となる作品の例として、明らかに *Champavert* を思わせる屍体小説 (roman-charogne) をあげているが、それを、神経質な伊達女や、すさんだ料理女が大いに消費していた、きわめて愉快な小説の種類 (genre de roman très agréable et dont les petites maitresses nerveuses et les cuisinières blasées faisaient une très grande consommation) と呼び、その種の小説を積極的に弁護しようとはしていない。

[註]

- 1) これらの記事は、Ph. O'Neddy: *Feu et Flamme*, 1926, Bibliothèque Romantique の編者 M. Hervier によって Introduction 中に引用されている。
- 2) *Feu et Flamme*, ed. cit., pp. 5—16.
- 3) Th. Gautier: *Les Jeunes-France*, 1878, Charpentier, pp. 201—210.
- 4) Th. Gautier: *Histoire du romantisme*, 1911, Charpentier, p. 53.
- 5) *Feu et Flamme*, pp. 1—4.
- 6) P. Borel: *Rhapsodies*, 1922, La Force Française, p. 13.
- 7) P. Borel: *Champavert*, 1922, La Force Française, p. 35.
- 8) *Les Jeunes-France*, pp. I—XVIII.
- 9) A. Boschot 編, Th. Gautier: *Emaux et Camées*, Garnier, p. XVIII.
- 10) G. de Nerval: *Oeuvres* Tome I, 1952, Périade, 2 me édition, pp. 752—753. J. Richer はこの lettre が 1832年9月以前に書かれたものと推定している。
- 11) R. Jasinski: *op. cit.*, p. 70.
- 12) *Histoire du romantisme*, p. 19.

IV

Gautier の *Albertus* をはじめ、O'Neddy の *Feu et Flamme* 中の一編 *Succube*, Borel の *Champavert*, Nerval の *Main de gloire* (1832) 等、Petit Cénæle に属する若い作家たちがだいたい同じ時期に、悪魔主義的な作品を書いていることは、偶然の一致とは思われない。むしろそこには多くの研究家がみとめるように、E. T. A. Hoffmann や G. Byron の影響、また Nerval の仏訳 (1828) でフランスに紹介された *Faust* の影響があるだろうし、かれらがいわゆる conte fantastique の流行を追ったとも考えられる。しかしかれらが作品のなかに悪魔を登場させるのは、とくに悪魔こそ反俗精神を最もよ

く体現するものであり、悪魔主義が世の俗物たちをおどろかせ、煙にまく最もいい手段だったからでもあろう。

Champavert 中の一編 *Don Andréa Versalius, l'anatomiste* は、若い妻の不貞を知った老解剖学者が、妻の三人の愛人をつぎつぎに解剖し、その骸骨を妻に見せ、最後には恐怖のあまりたおれた妻までも解剖するという、気味のわるい話であって、徹底した悪魔主義の現われと考えられる³⁾。そして *Borel* の場合、その悪魔主義はさらに神と神の創造 (Création) への反抗というはげしい形をおびる。この小説集の架空の作者にされている *Champavert* は「もし神が存在するなら……ぼくは神に挑戦する……もし神が存在するなら、それは絞刑に処すべきだ」(S'il était un Dieu,……je le défierais!……s'il était un Dieu, il serait pendable) と、冒瀆のことは吐いた上²⁾、愛人を刺し殺して、自分も自殺してしまう。

O'Neddy の *Succube* には *Gautier* の *Albertus* の影響があるといわれ、実際どちらもほとんど同じ題材を扱っているが、その調子はかなりちがっている。*Succube* で語り手を襲う淫夢魔は、淫蕩的な身なりの仙女 (fée à lubrique toilette) ではなくて、醜怪さをさらけ出した骸骨 (squelette m'étalant toute ses hideurs) であり、ごつごつした腕で語り手を抱きしめ、唇のない口で接吻をせまる³⁾。つまりここに登場する悪魔は、標題から想像されるような色気もユーモアもない、醜怪そのものな魔女である。そして *O'Neddy* の場合もその反抗精神は神への反抗となって現われ、作者は「数千年の幸福のためには悪魔を呼び出し、魂を売るであろう」(j'évoquerais le Diable……et je vendrais mon âme/Pour quelque mille ans de bonheur!) とか、「神以上に芸術家になる」(Etre plus artiste que Dieu!!!) とかいった冒瀆のことは述べている⁴⁾。

これにたいして *Nerval* や *Gautier* の作品に現われる悪魔主義は、はるかにおだやかであるといえる。*La Main de gloire* は、ある男が右手に魔法をかけてもらったおかげで決闘に勝ち、決闘さわぎのみも消しを頼みに奉行のもとを訪れたところ、手がひとりでに動いて奉行をなぐってしまい、そのため絞首刑に処せられるが、刑がおわるとこんどはその手が死刑執行人をなぐりつけたので、怒った死刑執行人が手を斬りおとすと、手はとびはねながら、はじめ術をかけた手品師のところへ戻ってゆく、という話で、怪奇というよりこっけいである。*Nerval* 自身これに *histoire macaronique* という副題をつけている。

こうしたこっけいさは *Albertus* にもはっきり現われている。この千四百行をこえる

長い詩は、画家であり騎士である Albertus を魔女 Véronique が若い美女に化けて誘惑し、破滅させるといふ、伝統的な筋書を用いているが、悪魔の醜怪さにもまさとされる Véronique の醜怪さは、あまりにも誇張して描かれているためにかえって悪魔的な陰惨さを失い、ときにはこっけいになってしまう。とくに Albertus が誘惑にまけて Véronique を抱こうとする場面にいたっては艶笑的でさえある。しかもその場面の Albertus が Véronique をベットのふちに押しつけたところで、作者が登場し、「ここで古典派の語り手なら、おずおず顔を赤らめて、そのしとやかな文体を中断する」(C'est ici que s'arrête en son style pudique, / Tout rouge d'embarras, le narrateur classique) と言って、さらに例の皮肉な調子で、はだけた胸や、短い下袴から目をそらす謹厳家諸君 (Messieurs les rigoristes) に向い、「芸術家の作品についてなぜそんなに大さわぎをするのか」(Pourquoi donc tant crier sur l'œuvre des artistes?) と問いかけている⁵⁾。また最後に登場する悪魔そのものも、伝統的な、硫黄臭い、おそろしい風貌の悪魔 (un diable / Empoisonnant le soufre et d'aspect effroyable) ではなくて、皇帝ひげを生やし (Portant l'impériale)、長靴を鳴らす (Faisant sonner sa botte) しやれ者 (un élégant) であり、ダンディな悪魔 (Le Belzébuth dandy) である⁶⁾。そして主人公 Albertus は明らかに *Mademoiselle de Maupin* に登場する d'Albert を思わす人物であるが、唇には嘲笑的な微笑 (un sourire moqueur) を浮べた美貌の騎士 (beau cavalier) であると同時に、絵画と詩を、音楽と同じように熱烈に愛好する芸術家 (un homme d'art, / Aimant tout à la fois d'un amour fanatique / La peinture et les vers autant que la musique) でもある⁷⁾。だからこの詩にみとめられる悪魔主義は、反俗精神の現われにはちがいないが、Borel や O'Neddy の場合のような、社会への挑戦、神にたいする冒瀆という積極的な反抗ではなく、むしろ、社会や政治に失望し、俗人とその信奉する神を軽蔑して、冷笑的な超然とした態度を保とうとする、一種の dandysme であったということができよう。その点で Gautier の悪魔主義が消極的悪魔主義 (satanisme passif) と呼ばれる⁸⁾ のももっともである。同じ頃 Gautier は、のちに *Les Jeunes-France* の一編となった *Onuphrius* を *France littéraire* 誌 (1832年8月) に発表しているが、この小説は、主人公 Onuphrius が、悪魔というより、自分の妄想で作りあげた悪魔の幻影に悩まされて、気がくるい、ついに死んでしまう話であって、Gautier は主人公の頭がおかしくなったのを Hoffmann の小説を読みすぎたせいにして、この小説に *Les Vexations fantastiques d'un admirateur d'Hoffmann* という副題をつけて

いる。だからここでは、Gautier は当時 Jeune-France のあいだで悪魔主義の小説が流行していたのを諷刺し、行きすぎた悪魔主義を否定したといえる。

このように Gautier は Nerval とともに、作品の上でも Jeune-France の過激派と呼べる人たちから次第に遠ざかり、反抗的、破壊的な活動よりは、創作活動にうちこみ、とくに *Les Jeunes-France* 以後は、冷笑的な態度も捨てて、かれ独自の理想を芸術的創造のうちに実現しようとする。その意味で最初の長編小説である *Mademoiselle de Maupin* はとくに重要な作品と考えられる。はじめ1833年9月に Renduel 書店と結んだ契約では、この小説は翌年2月に出版される予定であったのに、実際に第一巻が出たのは1835年の11月のことだった。この事実は Gautier がこの小説にいかにか時間をかけ、念を入れたかを示している。実際ここではのちの *Emaux et Camées* (1852) にまで一貫するかれの理想美が追求されているといえる。それにたいして *Préface* の方は、小説そのものとはほとんど無関係で、ジャーナリズムに現われたブルジョワ的道德観とその功利主義にたいする攻撃におわっている。そしてその攻撃は嘲笑的であると同時に、かなり戦闘的でもあり、その調子は *Les Jeunes-France* の *Préface* にくらべるとはるかにげいしい。だから、それまでに反抗的な仲間からも次第に遠ざかり、ジャーナリズムにたいする不満もおさえ、ある程度超然とした態度を保ってきた Gautier が、Villon 論をきっかけとして論戦にまきこまれ、ついにその忍濃を爆発させたのが *Mademoiselle de Maupin* の *Préface* であって、これはなによりもまず *œuvre de circonstance* であった、ということができるだけだろう。

〔註〕

- 1) M. Milner は超自然的な筋がないという理由で *Rhapsodies* も *Champavert* も satanique な作品としてとりあげてはいない (*Le Diable dans la littérature française*, Tome I, 1960, J. Corti, pp. 521—522)。
- 2) *Champavert*, p. 380.
- 3) *Feu et Flamme*, pp. 32—33.
- 4) *ibid.*, pp. 20—21.
- 5) Th. Gautier : *Premières Poésies*, 1870, Charpentier, pp. 42—43.
- 6) *ibid.*, pp. 49—50.
- 7) *ibid.*, pp. 26—33.
- 8) M. Milner : *op. cit.*, p. 532.